

林菊

池
京

平明
編

上方狂言本

五

古
典
文
庫

林菊

池
京

平明

編

上方狂言本

五

古
典
文
庫

古典文庫第二九五冊

昭和四十六年十二月二十日印刷発行

© 非売品

編者

菊池 京平

発行者 吉田 幸一

本言狂方上
五

東京都板橋区熊野町三四

印刷者 帝都印刷製本株式会社

発行所

114 | 東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話(九一〇)二七一七
振替口座東京一四五九七番

目次

凡 例	三
かしまのかなめ石	二
大みや人はつしまだ	六
松 風	一九
おしゅん 伝兵へ 十七年忌	一五三

凡 例

一、『上方狂言本』の第五冊目として、早稲田大学演劇博物館蔵、安田文庫中の「おしゆん 十七年忌」と伊原青々園文庫中の「鹿嶋の要石」「大宮人初しまた」
伝兵衛
「松風」の四篇を収めた。うち青々園文庫の三篇は、いずれも青々園自身、あるいはその依頼によるすき写し本である。

一、収録本四篇はすでに写真版としてかかげ、翻刻にあたっては、第一冊目になりやすい読みやすい方法をとった。

一、解説は書誌的な範囲にとどめた。

一、本文、解説とも菊池・林の共同作業によった。

林	菊
京	池
平	明

解 説

鹿嶋の要石

早稲田大学演劇博物館蔵

松廼舎蔵原本からのすき写し大本（縦三・三糎×横七・八糎）一冊。最終丁に青々園自筆墨書で「右四十一年三月十八日夜松廼舎蔵原本により校了 青々園主人」その下方に同筆「以下落丁」とある。原本も完本でなかったことがわかる。袋綴、藍無地の表紙で左端に青々園自筆の「鹿嶋の要石 都万太夫座」の題簽。本文匣郭は四周单边で縦三・三糎×横五・三糎、丁数は十二丁二十四頁。但し初丁は原本の表紙及び目録のすき写しである。本文行数は十五行、一行に四十五乃至六十五字。第一丁には柱刻はない。第二丁目に「かなめ石 三」とあり以下十三まで（実丁数は翻刻中に算用数字で記してある）。三ウ二ウ・四オ三オには見開き上段一図、下段二図、六ウ五ウ・七オ六オには見開き上段一図下段二図、十オ九オには上下二図、十二ウ十一ウ・十三オ十二オには見開き上下二図、計七頁十図の挿絵がある。

七6丁裏匡郭外に「山下才三郎ほめ詞」とある。

第一丁表は原本の表紙題簽のすき写しで、右下に青々園自筆で「元禄四年ならん」と書入れがある。内題は「第一鹿嶋之要石付リ二女大名三番続」。刊記・板元ともに十三丁以下が欠丁なので不明。第一丁に「伊原之印」の印記がある。

『歌舞伎年表』によれば元禄四年、京都都万太夫座上演である。

大宮人初しまだ

早稲田大学演劇博物館蔵

伊原青々園が松廼舎藏原本からすき写しさせた大本（縦三・三糎×横二八・〇糎）一冊。最終丁に青々園自筆ペン書きで、「松廼原本により騰写せしめ校了 四十一年三月廿九日夜 青々園主人」とある。袋綴。藍無地の替表紙。題簽は青々園自筆

元禄六年か

で「大宮人初志まだ 都万太夫座」とある。第一丁表は原本表紙のすき写しで、横題簽の右下にやはり青々園墨書自筆で「元禄六年ならん」と書入れがある。本文は縦三・七糎×二五・五糎の四周单边の匡郭をもち、全十三丁二十五頁。但し初丁は原本の表紙及見返しのみすきうつしとなっている。本文の行数は十五行。一行は約

四十字乃至五十八字。柱刻は「大宮人 丁付。」第二丁は三、第三丁はちぎれにて丁付不明。以下五から十三まで、最終丁はちぎれにて不明。（実丁数は洋数字で記入した）。挿絵は三ウ2ウ・四オ3オ、六ウ5ウ・七オ6オ、九ウ8ウ・十オ9オ、十二ウ11ウ・十三オ12オにある。九ウ8ウ・十オ9オの挿絵は下段二図、あとは見開き上下で、下段が二図にわかれる。計八頁十一図である。

内題は「第一^{おふみやひとはつ}大宮人初しまだ 都万太夫座」。刊記なし。板元は「八文字屋八左衛門板」。印記は初丁表に「伊原之印」がある。

松 風

早稲田大学演劇博物館蔵

伊原青々園がすき写しさせた大本（縦三・七糎×横二・五糎）一冊。袋綴。表紙は白地に茶の格子で、中央に題簽「松風」（青々園筆）とある。この題簽匡郭の右肩に、青々園自筆で、「元禄十三年 都万太夫座」の書入れがある。本文は縦三・九糎×横二・七糎の单边匡郭をもつ。全十丁十九頁。但し初丁は原本表紙及び表紙見返しのすき写しである。本文行数は十五行。一行に約五十五字乃至七十字。柱

刻は「松風 丁付」となっており、初丁には「松風 十三」とあり、第二丁から三〇七、八ノ十、以下十一ノ十三である（実丁数は翻刻中に算用数字で示した）。挿絵は三ウ 2ウ・四オ 3オ、六ウ 5ウ・七オ 5オ、十一ウ 8ウ・十二オ 9オの見開き三個所で上下左右四図、計六頁十二図である。

初丁表に原本題簽の写しがある。横題簽については、青々園自筆の朱の書入れがある。「これは後に根本を直せし時他の紙片を誤りて貼りしならむ松風の狂言座本は藤十郎なりし事見返しの役割にあり且つ片岡荒木は大阪堀江の芝居にて右の役割には人名見えず（青々園）」。また自筆墨書で「元禄十三年京都名代都万太夫座本坂田藤十郎の狂言なるべし同年同座二の替「けいせい弘誓船」の役割と俳優の人名同じければ也但金子吉左衛門だけは彼れにありて此れになし、吉左衛門途中より休みて此狂言興行せられしならん」とある。内題は「上まつかせ女のしれうお侍の手がら帳 でき狂言」。刊記はない。八文字屋八左衛門板である。初丁表に「伊原之印」と印記がある。

おしゆん
伝兵へ 十七年忌

早稲田大学演劇博物館蔵

安田文庫本。半紙本（縦三・五糎×横二・七糎）一冊。仮表紙見返しに「この書大槻如電翁より譲らる 表紙裏に幸堂得知翁ノ調へたる奥書あり おしゆん伝兵衛の事跡なり 年代不明といひ伝へたりしか此書によりて其事の元禄十四年中なることを知る 此書は京都芝居の筋書なり 大正四年夏 素堂誌」とある。幸堂得知の奥書というのは「此狂言本は京芝居にて享保二年二ノ替り也 名題蛭子屋吉郎兵衛 座本大和山甚左衛門 情死は元禄十四年にありし事とみゆ 幸堂調」である。

しかし表紙見返し上段の上梓広告文に「右四色共に先月より本出置申候」とあり、享保三年正月刊の役者評判記「役者三幅対」京之巻の巻末の同広告には「正月十五日より本出し申候」とあるから、この狂言本の刊行は享保三年二月と考えられる。かつ享保四年正月刊の評判記「役者金化粧」京之巻にこの作品の芸評がのっているので、この作の上演は享保三年であることが確認される。従って幸堂

得知の考証した享保二年説はあやまりである。

袋綴黄土色無地の本表紙で、題簽及び脇題簽剥脱の跡がみえる。題簽の位置に

幸堂得知の筆で「享保貳年作

おしゆん
伝兵へ

拾七年忌」と記してある。本文匡郭は四周

单边で縦三〇糎×横二四・四糎、丁数は七丁十三頁。本文行数は十二行、一行に四十

一字乃至四十八字。柱刻は「おしゆん 丁数」で、表紙見返しは十三、初丁三で

第三丁まで順次四・五、第四丁は六ノ十、以下十一ノ十三まで（実丁数は翻刻中

に算用数字で記した）。

三二ウ・四二才見開きに一図、十一五ウ・十二六才の各頁に一図ずつ計三図の

挿絵がある。挿絵の上部には評判を記してある。内題は「上」

おしゆん
伝兵へ

十七年忌

大和山甚左衛門
芳沢 あやめ

大々あたり」。刊記は八文字屋八左衛門板。印記は「好古癖」「森

氏」「素堂蔵書」「安田文庫」

まも
り
が
た
な

か
し
ま
の

か
な
め
石いし

山下才三郎ほめことば入都万太夫座

ふ
屋
町
通

八
文
字
屋

八
左
衛
門

座本

山下半左衛門

都万太夫座

作者

富永平兵衛

かしまのかなめ石

付り
ふため大名
ふため男

都万大夫座

上　とうじがなじみ付酒屋のそひねたいないのかぶ・ちはやふるつる
ぎのまつり

中　わすれぬなじみ付ふせやのまくら我子人の子・心のまがるつまど
のかけかね

下　むかしのなじみ付しづやの小判くびとつりがへ・ふうぞく入都の
むかひ

一はぎはらかずへのかみ　あだち三郎左衛門

一手かけものは山　山下才三郎

一こしもとりんや　岩井花之丞

一 おなじくしげや あさい重弥

一 小しやうさもん とやま千之介

一 さだうよも市 いくた善六

一 からう石まき大ぜん くどう十郎左衛門

一 侍松嶋伝之丞 藤木太郎右衛門

一 かしま神主藤大夫 よこ山藤左衛門

一 若殿藤若丸 しがきさまつ

一 いはさのつぼね 小かん太郎次

一 万年酒屋弥三兵衛 まさき甚左衛門

一 女ぼうおむめ みつしまもしほ